



董氏家藏

雜
10
九

9
3585
9



曾イ門
號 355
卷 9

貞女列女判上目録

貞女列女判上目録

けこぜんの事 付リ 侍所 行判 義海乃事
びきりの玉松と云女れり 付リ 太田乃
山崎の聖生 同氏 夫婦 善乃乃事 付リ 太田乃

明治二十八年十一月五日
呼々施秀氏寄贈

明 口 9
3585
巻 9

貞女列女判上

びしりませ

身元無き物結

けさごせんとすくハ源の渡がまたりとるわがら
いさうくく良くおなりもつはいさとしを有氏志
りもとつひくハ文賢上人のすくとくやいさご
わく借たりとんけさごせんと無きさひ清ま
のふねにあまはれ玉衣にさよごもさるびく
さもおくりしはりらととさしつひてけさごせん
乃母いもがなまおむらとさうひてりまけさご
せんをおひてさうにまははつせよもかびさすお
かどくハむらちにけさごらのおりひとささしひて
びけはひてんやといつを壊ハしれ外にちぢられけ

東京 大久保
餘丁 百拾番地
坪内 蔵

一うめはなまよひまじりか家に指く御に寝屋乃
人ちくめさるばらしもちりちるぞうたれにちひ
給て人よゆるさるあにの給いぬげほくこころそと
の妹いそゆるさあ今い甲くも後が書になりぬ
まば子代をよひさまよひそそにかなどまび
ひやは書いおひと申り給くといひりりとり
おが人よくもかつこいりかと捨て換れ御にじ
つとけまよひかた給つぬさるを今書いたるまら
おるりいふくも書れおとまに書るさうらり
さひより給つてひくもをえりといひとま時り
ととまよひと一とらまよひのまらまらとて
ことしつらつはくても給りり一日ぬにかひ

を娘の母もせんこかよむそくに女とびくつらくれ
ふくんととびいぬ一給たつび地給つて母をまた
り考げかろ人さる一又母とすくてもびと給く
どいそとまよひりりことまに書らつら書れと今
外書して死さんとおど給く一くいと女ハも
うもつらつらとびくこいもまよひつらり一
やあつらつおひひらつら一ささめられバ母れ今
わらうれとんたつて自れぬふそむけとと
見よとまよひとらつら作はゆら給つらんとらバ母
とのおよとらつらつらにこいそとらりらとら
こびけつらつらとらつらとらつらとらつらとら
とらつらとらつらとらつらとらつらとらつらとら

形はつていづれかむはるまじけきうら若てうら
 こそはんやまゝかぶくそいぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 て磔ふさ後やぞー髪あふふはれたふささうりれぬ
 きさうとあうーにうら若くと産くそくーといつ
 こせうーいまにうら若くひほとさあもくぢぢぢぢ
 縁入らとまうらと我悪うら小袖をまた後はよきせ
 づくまうらにけくつは男乃ぬ後束と美さ
 けよわさう髪とぞんごさうてつごと湯よきうー
 ぬー火うらうーて寝うらうらりらとハハハハハ
 うーとおひ志うび入てさうららもバ髪女のささ
 わさうらこれがおあさう後さびぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 おさうらうびてこそかゝれ後さかぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

三 狼藉ありやわ人のなう池うそれらまするさうと考
 といふらういづれ侍ともおとすすはれうらうら
 とさうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 後首はわうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 ねのいゝ今いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 へんとてそれらうらうらうらうらうらうらうらうら
 我うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
 つとも貞列のむとさうらうらうらうらうらうらうら
 婦人よざんばうらうらうらうらうらうらうらうら
 く野ひ若うら今まあに殺さうらうらうらうらうら
 野愈とさんど若くと首とさうらうらうらうらうら
 てなまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

とくもしくおれん
ハ人今ハおれん
でも今義士ハ自害
自殺とおれん
をたすけりやもに

賛

女貞 唇 碑 傳

便 人 圃 血 啼

晶 昭 珠 赫 研

鳥 惜 八 圭 玼

八圭之玼可見評論

和歌

んよとみづはほこもこらちり

才とたふにさうちりひならせ

玉樹園とほそぐらうさこれや

中うくくしん子のあかり

評

嗚呼哉貞女母れとせびに不孝とりく

すといへともあさぐらう終に待とさしてく

せり毫髪も死人にしばとゆるせるのらう

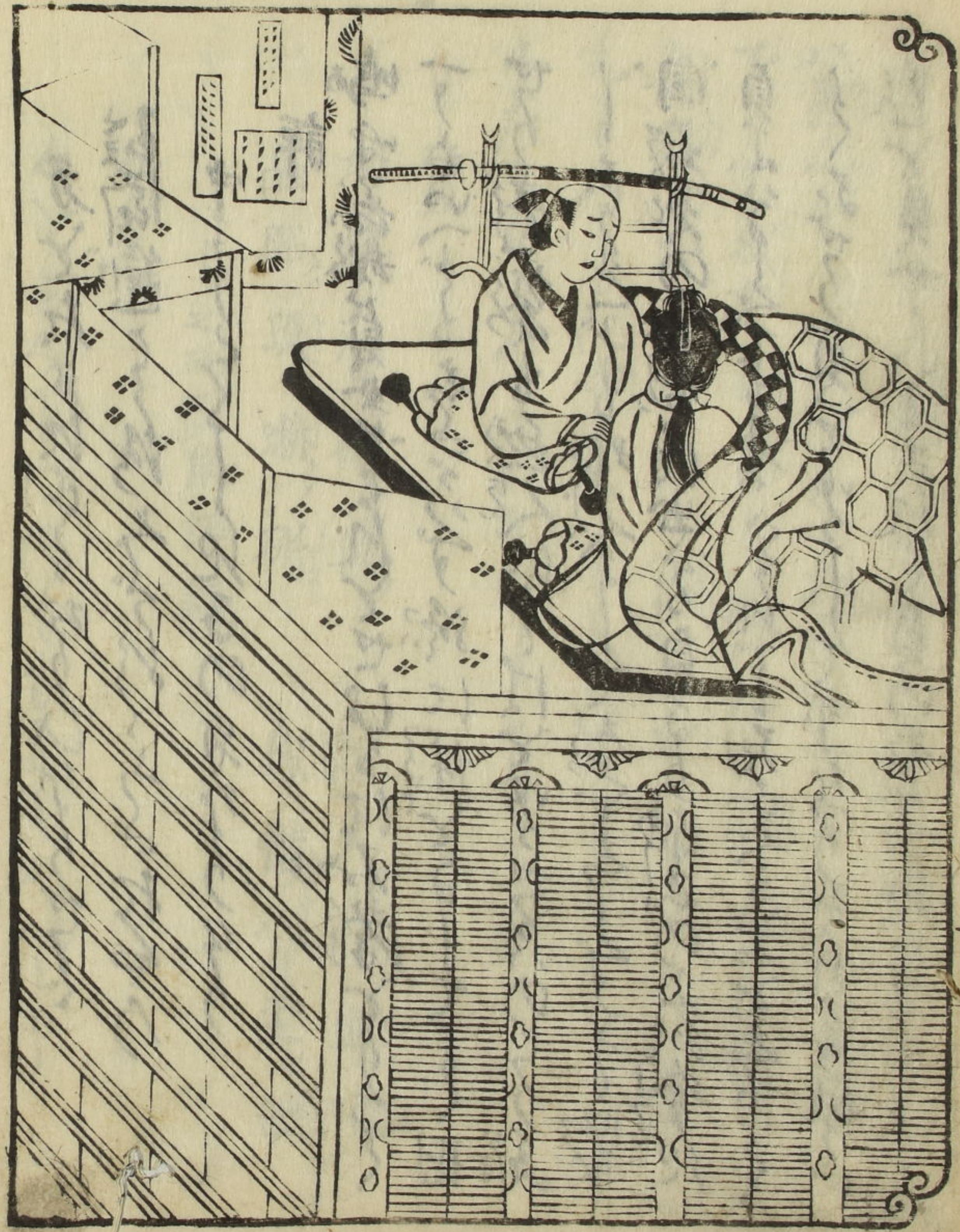
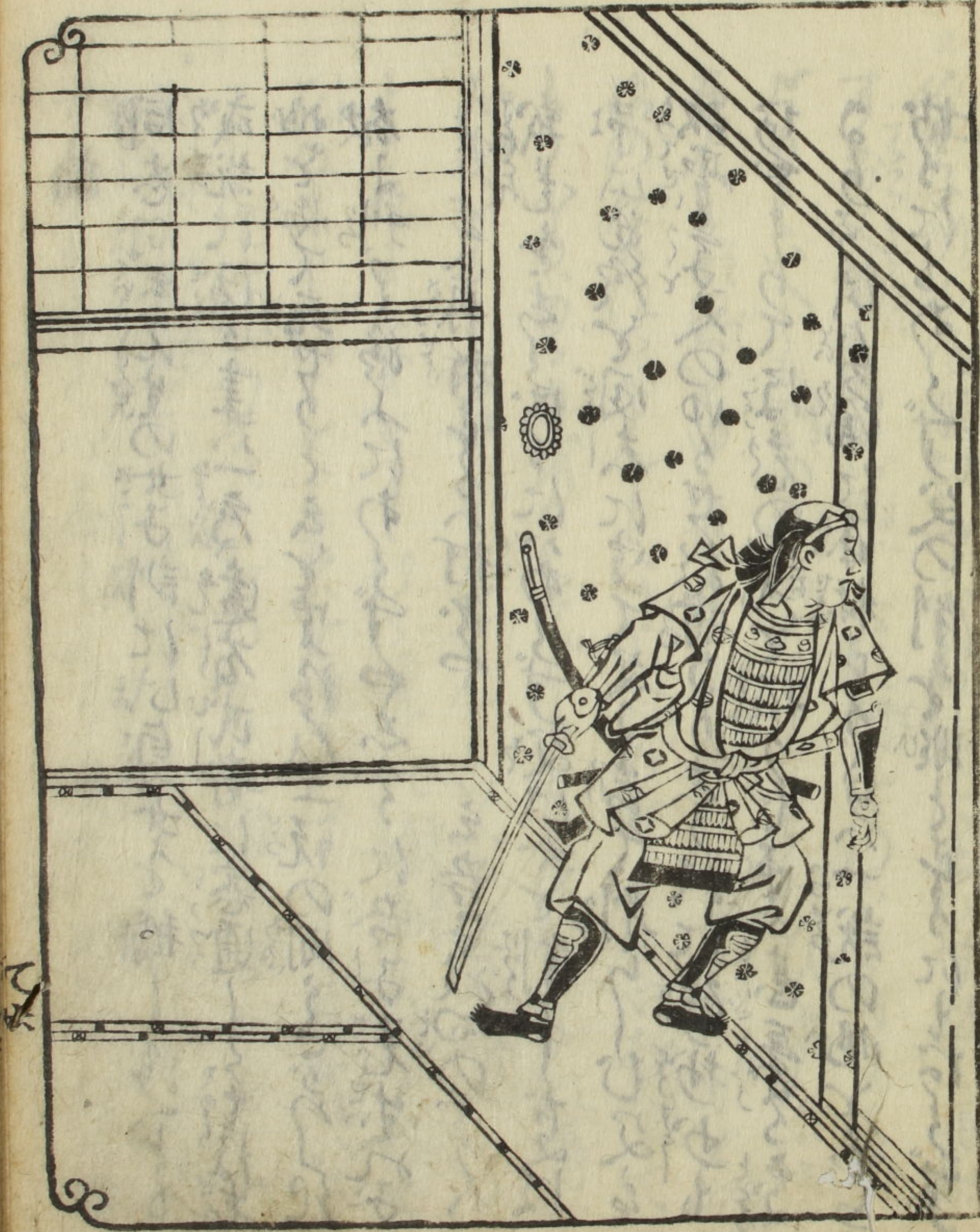
一ちうもども婦人うしてあさぐらう

固執の氣變に出る貞より赤心の上れ

貞よふらふてもんがれども死んてあさぐらう

くみせり貞とゆるして可なりそれらう

貞と貞女といふがれを貞のあさぐらう



論

同志同云先生の女子訓には貞女を稱し終らざるも
或説に後が妻ハ一為遠者武者に塞通し終らざる
也と悔て死せりと云とす終らざるの同云と云り死
終らざるにわづらや志らるに音子先世の
として再稱するは行や 云音子れこの
我を志らざるにわづら父は女と削し直は
予は也終ると同志に於て父は若て削らむは父を
或る女子人のゆるせぬ者あり志らるに解抄あり
はるしりてほえの誤と指し予は甚要なる事
あり予は貞婦に奉稱するは一説の也と云ら
ばるにもわづら父の削を逃とざるにもわづら

父女子訓の儀深切なるは行むに悲びず故は再稱
す父論云け女ハ死すべし期をのぞかずよく死
せりといへども玉の疵わりのりともいひまじり一
悪人よと云ふとゆるせらるは海女一母老らるやと
娘のたりに死さんとならざる命のよしとや存念て
もくやりある方はりらえりともとにわづら娘に
不義と云くむ母外害せんといふと死ねといふ
とも娘よふ言とすむらほれ臆病りのなれを
死ぬまじ何とぞと云ふとゆるさずとも貞女れい
こゝ他は形わらざるをのころおは紀事なりとい
備減に感懐せりけ備のよく悪人にあはるとい
せらるる心志まじり貞女に疵あり後世貞

列をおりの婦人たるをあらざるべしあやまりあらん
幸とせたる故に予父れ論とおして玉のこさず
たつらんゆゑあつらんとおりの故に父の削まる
と奪一一度ふ義わりやいさやのさうぐひした
ごらんよあらず別一説のふまなく貞列とたてし
る正説さうが論をれ疵をのどくつて手申さ
む万一一説の不義固とさうば其不義とるぞ地父
が激づくとさうらんりもい書紙んじ女子んどう
に用ひて可なり予正説さうげう貞女いあげう
とく衆人のりひとさうも予ハ一が棟なり行也
いさまんやばいれとさうもうさうさうげう
をさうも予正説さうあらず貞女と不貞と疵を

不疵を論ずるの

今乃世

とれいさうおざう

延寶年中の比とくも氏茂の圃と孫川と云とこふ
に信り小沢氏といふ人松といひすちとりさうあ
らととれんれさう一とさうと十七のさうおまじ
わさうの野は氏と云ふめらういひ女んいさうさ
らとちもさバまよはさうてさうやく一とく留め姑
とらづら考終なり地は父母天徳のは男不幸に
して疵なかりにさう女これとさうさうげふ孫よいの
アと伸よ念ト薬とりらひらまぐいさうとさういさ
いさうさ天乃とがさうとさうもたうとさうにかりさ
ておよびぬさうり足なくとさうさうさうさうさう
と

らぬにやとやつ一日の歌とありにきて文
よいなりにくうまのくち合とるこれをもちた
ましくも人のたふしけわりくうま地とわくれをりまハ
くりぐまよすちり人整本にらるるの共操にんド
てのら合とわくり本言れ細布よあつ糸どもち地ひ
とちどちりてゆきこりまびじ一乃富にハはる
くもわ一〇どびし終といふ色れ後一ははれ乃
神女後の杖にたぐく西氣飯を新れ物またぐ二
黎と奥の義一してまぬもこみた一ぬぬぬぬぬ
やまひぐのキまにささうふぶりハんやとちりりその
おれ屋にまう一とわや一平めぬをうら糸のみさ
とまぬぬもちとちとけねがみさかとんさう感一ぬ

秘とかりてむりものねまへやう地さりむ一ハ
いづ月れおもひけとわさじさまにうら花の文履一
なうささみれ下にうら糸糸と二細ぶりさるる
こらうすほそりもも海土乃塩ゆきまでむ致あつるも
おまのこちに髪は揚がれば地のたまいにしとるす
野の鳥とさうげまかたれまう一にひまをうやにり
んてれどなぬ乃とらかうらやよりりん山の井れ水
くそ桶をいさ地川とわりて野のいとまみうら文
にうさうさひく遊れあうれたとれをいさゆれと
いひりくさびけてんととれども法忽なるあまわが
てこにくくはくぐはす地めのどおどうれてほく
女のさうらにあらうくたさうづつあまゆり一と



又ス月夜文をうきとすはとらるる里にかりまひのちあゆ
 こして川のあまきさり東にまきりて都にゆかんまきとふ
 リとちふに人かきさけありと今罷ハこになんい
 へどおまもあらうとなく又ハまがちといさ死うせん
 とこやらむむかも神もむらにめられ川はまきり
 ろりと一衣もそにいゆるさかーそもく松が父
 其里とてし人よまきさるるうんうんなれど
 人のさしひもく娘れを海とばんとだにせすそと
 ていさう我れおちりむむととんらうーれあひい
 げあそくー遠恨るもさううーて美人よゆらー
 ゆらうらうおれげと見えむとちあひ

じきりあはびしてそのやうにいへて女はなほとほしむく
いふやういふをわさけられたらうらぶらぶのまはれ
まはるとくがめれこれとしらみてんひんかのうらに
死よこころせりやにわるとにづりまよとくめくさうの
ていまにあらずや夫のふ率ハ家不存なり再嫁乃
事ハゆかり終つてもうも病まをこころんてあつ
いひとくも唐よくりをほはねや里へしゆぎす父母ハ
おしけたる人よとくおどろぐくくちうめらてく
子女こそおそれしじきりあはともおもつてあまうこ
清息とあそべられたりねやこの中いたしよくり地は
し紙の上業にさる地ちとんをわくぬありとぬれお
ゆへとくうしとてまくとしとかりひ或時女にわうひて

いひらるゝ我こそはつ男とわさそこころで口をゆへに
さゆ地目めんじや父母れをちも恥辱されバ里にぬ
つといふわの人よとくいふらくぬれあつとくさゆめ
こころばらとくもつりあつとくもつりあつといふバ女はら
くうらとくもつりあつとくもつりあつといふバ女はら
さうまれば地ちといふも終ひ今つわさまうくぬ
あひしはらにさつとくもつりあつとくもつりあつといふ
あつとくもつりあつとくもつりあつといふバ女はら
あつとくもつりあつとくもつりあつといふバ女はら
すく終りんあつとくもつりあつとくもつりあつといふ
むめかまうとくもつりあつとくもつりあつといふ
てう美人よはまもつりあつとくもつりあつといふ

ゆりつらぬてんかきくまのむらさきうしといへを野に同
とあまはけりいふもくもんよまうせ給くといへを女もら
ひいよくいりりかこころもさうりりりさうりりて水
早くせづりやまてつあよその分野よて死よれば
うくなげいどせんかくさるるもこのまうりときり
れまに三年がうらむらどいりにもりりてまのす
とまげさつこまをもつるよあまうりりりりなり

賛

金一 行 當 夷 則

秋一 聲 殺 け げ げ

女一 蘿 後 草 復

扶 獨 槩 枯 松

和歌

志がくられをまふなりこづびうづがもく

たのむるなつとみまらむ
み代に光し松れいろけりもきめれ
きのむらけりいりならなり

評

人皆性善なり吾我松女不孝子て行貞道にま
る聖人しくゆへもいけい婦人と稱し給いざら
じや古語云有里貞女一人其里皆善也と松女が貞
感して継子継母の中ばくく兄弟の不和と和
ま婦の別舅姑の禮器とくすいりるれば父母不仁
よして娘貞なりやめこけりくも悪人
て舜の聖子とてうり嗚呼惜る松女行の貞よ
てん列女より不孝にして遂をまむを不孝行

或曰私不足故に列女に流るる世に知人よりさし

論

或同行の節にして公列女の風儀をなすれば公の節
之を夫に擡て再嫁せず人の性高きとて節人
此不能とて流るるは貞女なりけり松女は公中にて死
節にまじりて三女の喪とて不勢とて他人とみて
父母に降しおし再父母に孝あつべし若父母を
ひとむすのいかりに號位すとも可也それよりい
父母怒るる時又はやうけなきをよりこそし
節とせりていりなむ父母も其貞に可不感ま
のるに云ふざるべしして親子れむと流しひ又
其死去の節もまのりて忠ありて存生の父母と

不省其心裡のりやけに列女の風にあらずやそれ
忠貞の孝子れんふ出といつる貞もまじり婦人れ忠
父母に孝するは貞といひごとし其心と行と令
女に似たりふありといども令女の孝ありと見えて
いとより節義よりより父母に死せしむるとり
幸切ありといども父母をさすより再嫁せさると
然すまうれども父母兄弟あり夫の近親を喪せり
しりごころおほし再嫁すべしこの時よわらざれば貞と
みて信を守り松女が節も夫存命にして流るる
切なれを義におおしく令女にあらずとて流るる
つとす父母として自得せさざるして只一旦に
美とやづ其心令女と異なる行はせ美の美に出

たるの三年の暮しりし暮しりしあはれなるを
 愛するは實に其のまじきものなり
 人の物成とやいふ今にさういふもの
 とお分るがごとくさういふもの
 とくふふあり民間の地土れども
 ことばせよおぬくハ疵あわす
 らばまけけりけりんとおふれ
 ころいふなり

たるの三年の暮しりし暮しりしあはれなるを
 愛するは實に其のまじきものなり
 人の物成とやいふ今にさういふもの
 とお分るがごとくさういふもの
 とくふふあり民間の地土れども
 ことばせよおぬくハ疵あわす
 らばまけけりけりんとおふれ
 ころいふなり



は孝子の子さうんまるといふに聖に筋を
欲せ八時にあづかるよりとて志を著す万端はこれ
なり

向乘ハ二十四孝に幾端にありとも孝といふは
云々ハ聖人なり孝弟忠臣の名ハ賢より必すれは
二十三孝ハ孝の至りにして外聖人大賢は徳か
曾子といふも孔聖に學びば孝子にとり
人なり孔夫子に學てほ大賢なりといふは乘ハ大
聖より伏羲に下りて出馬に洛書に記され乘にお
わてハ象來つて牛馬一鳥一獸をりてらさざれば天と聖
徳は合すゆらんなり

一山脈國を以て東南にありて一村あり行來あり

西の方大川よりして三方險山なり里の四方皆名所に
て地系あり一はく地優よ人の心や一とおなり何某
が父ニ行方なりすみく何某とてなりまに二歳乃
一はくおふにありてうらうらと何某がなりうら
わきとかり一はくおふに一はくおふにいま赤子
なり一はくおふとてむつとて乳母とてて其
里の地土も同氏といふものにけのうらうらけ
同親族にもありす思父とてせうの村に居るゆり
なり一はくおふに一はくおふに親族のうらうらけ
アハ某二歳のはまの子十六七歳なり一はくおふと
て家門繁昌すあるにせ同何とて其の族なり
實の父母のどくありとていふは王れど一はくおふ

妻ハもまのり善女とて何ゾハ乳母にまかせと
ゆりてあつかりひね言練とてまよふま婦れ子に
養育せしむ事十二の其間怒る文と見えず何
某と云ふおひひもまよふ所時おろろる其
黒ハ系家れハ氣糖田かり生回答人より一六上
勝にさこり一庄屋とた乃せ給へともま身
目まされこれと愛の甚くして再云練とてま
石入す強く命一給へかたてしてまれなり役
ほしむ回我來北友とて村中に命して
我夫人の命一給へ接れ給へま育はけ幼
能る者我まそじくに回一と又或人生回書に
云ハ其子ハ既ハ教督れ相續より是と給へ月一給

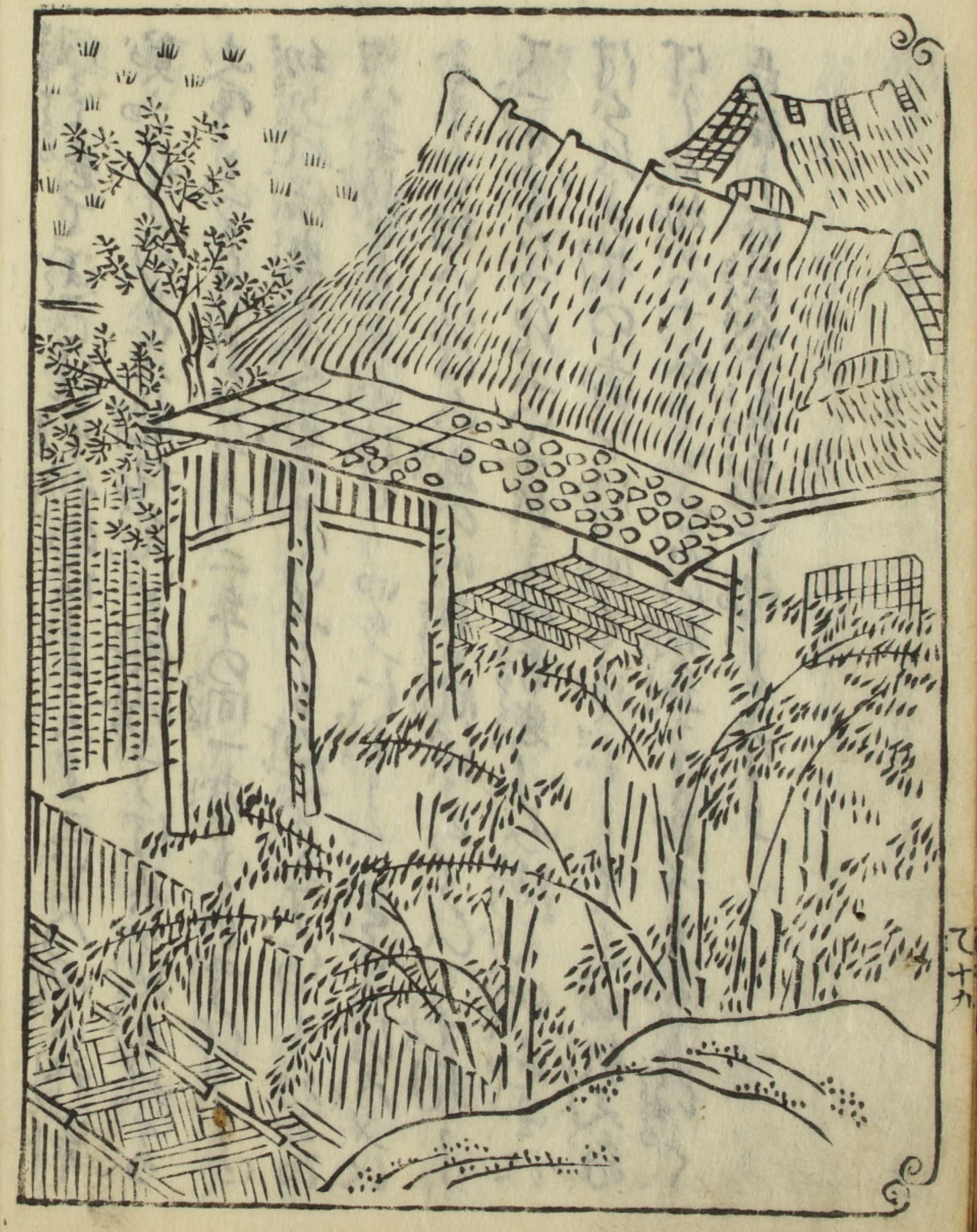
夏疎にして此の意河部り給へ一給へ
妻養云我美子なくしてま子とて今少給
とてま一けりまもま給へ給へんめとたり
今ハ甲妻とて我美子の給へ又実子なりぬ
我智はま美子よりけ幼給ハ美族の給へり我
まぬ給へるりものと給へあつと給へ義理の
専けしむれあつと給へも我ま主婦田舎に
回よとらと給へるらふめとてまかりか
らたけハけまと給へ月一もてまつんと
成人のほハ必も何給へよ人なりま
ま娘のまにまら給へり成人のほハ
信わらんとまら給へ乳母にまかせとて

津かゝ乳母ハ乳とせしむるにま婦とてらるるにぞ
ふくくさくまつらん事成たりよぶらりといへどもまぬ
もにいへりこゝのれ実子なくしといへども親子の
忠告いへば又家督の継子あり幼志よおろそかな
つとて父れはんとて成おそくと村中こぞりて歡
稱す何某が実父なりが衣振扶持方乳母が給扶持
成おろそかといへども生同くする事なり父が書簡に報
トて云某身不肖なりといへども尊眼れ賢利と云く
幼君成りたくまつる而目のやうに不遇之某負なりと
いへども田宅不承一幼志に乳母の扶持に備はる
事一候實念一といへども幼志の衣振乳母の給
扶持も又安一何ぞおせんそ業成も之せばをば

何とて送らばに村のりり又里三里の中ハ林事
節之中の是ハ能相言と與行す何某が地をた
ま婦とてらるとも十二年の間一房もけず何がい
幼れは信樂夫人の御方なりと及ぶす何がい幼れの
肉ハ柔弱なりとを扱せり四男に及ぶす何がい
ふまどおにいび六歳の時乳母とてりて十死
て一生もなれいへばまぬ事成りしに
けがれし樹の齒とてゆく獲せしてまぬ事成
何がい幼名十女といふ名の相成るるゆるとて改
長女といふ長命長女と祝しけなり



二十



二十九

その後其子に孫三人は抱く孫は不便のものといふも
け成にけしにおよぶ生同夫婦其子夫婦は若て云
懐くゆかり色孫を女親乃にそとてば不足なり幼
志へ実父母にござりおつしませばり色夫婦と母の
きを身ふおとせ生同夫婦も起ておとせとびとび
東にじい天に仰て孫して云幼志息災運命成長
のら武運繁昌と先づいひく次に孫子
夫婦孫のうと新ふおとせと十二の一約もおこぬ
らず丹誠のいり人感動は何某其里とてなるれあ
ぬに越してのらも何げが事天にいのらゆかおこぬ
らびと其丹誠志をいりや予十二之文より新病より事
子孫ありて二ふあゝと何げが事おらそなりとび

事とおもれて別居はけりり隠居となつたなりと
つとく夫婦のうと何げが沈むるは津里郷村に
類の交とあつち推子唱奏を奏双六の遊戯なりて終日
終末樂年月におたづ一月もけず村に百姓に
なるゆふのいさげゆふふ一男女三十人と扶持とも
不きううん富有たつととも質素に〜二十人と
向は衣服羅漢と美ともふ足らふべしと何げにの
しん衣させくおの皆麻本綿と美は心と質素に
て村中に質素の者未をあらりのは有徳と徳一鑑
寡孤獨とわぐじ故よ五百元村に〜づら氏を
くなく貧乏の志よ一質素にして質素と志す
奴僕とくたつすつと皆村のよいそふ村里に

仁不道の者ありては怒りて甚し一服勇あがてふたよ
あまの男の眼しありてはわびて事甚し夫を
やうげありては嬰児もてさう家なれば
婦人権樂のてぬて是業はふたもさう一
トはと女工女工おしりぬにぬるまて一日もた
きうす奴僕とてげまさんさうさうひぬ
げく夏もつらひ生回なつらぬとらぬ田野にけ
僕はおさうさうとらぬま子主婦氣はさりと只
ども父母老におこさうげもばえても居て自動
婦が僕買されども姑いさうさう然とればは
なう人来ててはこれ奴僕さうさうに買姑とてさ
は若んば姑若く年乃り死ゆなうとては

う一男ははわいひまうさうさう番にぬれども人
ほごこさんぬおしりてはわびて事甚し夫を
の男女生同主婦の意愛にさう死感よれさう事
隣りてさうして主婦と崇敬はさう主婦れども
さ西國に返しては船若らうさうさうさう
一となり大いぬぬさう主婦と備毎念と悦では志
づこ三時づらわらさうさうさう家門皆仁慈れは切
ふは感して神と一はら嗚呼悲哉悟我生同行年
五十九才よして死に妻は十六歳にして死すは
私怨とさうさう悲涙と主婦死しては度屋路り
てより村中大い念念はさうさうさうさう
おさうさうさうさう同主婦が仁慈の厚ささうさう

一仕女にいつと見まゆめと惚ぶれまじり
に紅涙すまじ母氏絶すべれおろし何ぞか幼少れ時
の衣服をか法を具りて何をびすを一つものこす
ゆづるせめくの寸志かり生同喜に孫教して
す族吾の條はより共いんしてまぬの懸と報せん
心懸せんとなりよ行果負をり又千里とへら
ひともさるまゝ一まゆり交相書にまじり
ふ人おしぐましく百笑れ種なつとも今け
まぬの善約とまじりて書し又万一
せんとうりけ幸と書してし
まづく落後す幼少皆不富とやと筆れ
とーらに

贊

夫善婦慈家富貴

澤想樂麻山御暨

鳥厚哀哉死仁人

民失福寶予血歎

和歌

うらみそののなく言はあはれり
すざらー里はむむいづき
いそーくさよばとらんおの
かりたりとろくせま

評

家布ては村里におろよをんと
事父母のどー一窮威におろ
一あのお風の大からといつ

鳥

後されども父の教よかぬくへそ非せしむす墳
野されども姑の意にそねく他家不孝はあらず
彼婦本に在るがたりする女のそらもやと
うけあわらふ史賢なれば書の不後も又さず
してその人の婦人たるはこそしうちかたり
はわゆるくどり男姑に意なれば墳のあき
つびてその人れらされを何れもあつと
外よりふよくおなりたる馬路が編ハまぬのち予が
評ハ墳姑の同なりて遂に美されども理ハさるり人か
のどくおまはさるりこれよ比しと推しては
うらむ天にそむくゆなりそて死す皆ふよ
らんけし同史婦賢いふまはほしと

ながれども評と略しニ三ありて右の
何れが孩童なる内思はぬされども人見負
稱とやいそんちれども記するところ
やまけい章とらん人何れが死とく
の志にゆら

一

